



Referee Time

(審判だより57号)

2023.2.22 審判長:前上里 亘

2022年度・ありがとうございました。

沖縄県ハンドボール協会 審判長 前上里 亘

みなさん、こんにちは。

今年度も、3月高校春季大会、九州中学生選抜大会の2大会、JHL(2試合)を残すところとなりました。2月現在、年度当初の計画通り、皆様の協力を得て、全てのカテゴリーで無事大会を終えることができそうです。

この場を借りて、お礼申し上げます。ありがとうございました。

併せて、3月の大会・試合も最後までご支援・御協力宜しくお願い致します。

2023年度へ向けて

現時点で、情報提供となります(正式な発表には至っていない)が、2023年度より日本ハンドボール協会(JHA)では、審判員への指導・助言を担当する「アセッサー」と研修会での講師にあたる「インストラクター」を正式に設置し有資格制としていきます。

また、TO(名称はテクニカルオフィシャル、MO マッチオフィシャルとTK タイムキーパー担当とSK スコアキーパー担当の総称)も同様に有資格制とし、

2023年4月1日よりマイハンドでの登録が始まり、9月1日(金)より施行(スタート)し、各都道府県にて資格取得向けの研修会を設けていきます。

詳細がわかりましたら、この紙面を含めて各カテゴリーへ伝えていきます。

その際は、参加お願い致します。

今年2月、金城久徳さん(南風原中勤務)と金城康太さん(美里高校勤務)のペアが、佐賀県で開催された高校選抜大会へ審判員として参加されました。

2人より、今大会に参加しての感想やレフィリーミーティングで得た内容を次号58号で紹介します。併せて、同大会終了後、福島審判長より大会総括のPDF資料がでていますので、一読をお願い致します。



「九州選抜を終えて」

金城 久徳

自身としては2回目の県外派遣であり、心身共に万全の準備をして今大会に臨みました。

3日間の大会日程で5試合、最終日は代表決定戦を吹かせて頂き、とても充実した大会となりました。今大会は「安全・安心」を裏付けるレフリーの技術について多くの事を学ぶことができました。攻撃側の違反(正しい防御行為)の正しい見極め、違反を受けたプレイヤーの損傷具合に応じた罰則の適用が課題として挙がりました。これらを正しく判定するために、レフリーの位置取りとして攻撃と防御の「間」の観察をすることが求められます。そこでキーワードになるのが「13m付近」です。攻撃の最終局面に合わせて「13m付近」で観察することにより正確な判定につながり、選手やチーム役員等の「安心・安全」につながります。

その他多くのことを学ぶことができました。この貴重な経験を周りに伝えていきながら、私自身もレベルアップし「安心・安全」なレフェリングができるよう努めていきたいと思えます。

「九州高校選抜大会を通して」

金城 康太

2月4日～2月6日に佐賀県で開催された九州高校選抜大会に帯同審判員として参加して参りました。3日間の大会期間のなかで初日と2日目は2試合、最終日に1試合の合計5試合を担当させていただきました。試合ごとに福島審判長をはじめ多くの方々にご指導、ご助言をいただき、次のようなことが自身の大きな課題として浮き彫りになりました。

- ・ミドル、ロングシュートを打つシューターに対する違反の見極め(シュートへの影響、身体のコントロールを失っていないか)
- ・ディフェンスの評価(脚で付いて行く正当なディフェンス、オフenseのミスを誘発する攻撃的なディフェンス)
- ・ベンチや選手とのコミュニケーション(「よくないこと」だけではなく、「いいこと」も伝える)
- ・余計な笛を減らす

これらの課題を克服できるよう、今後も様々な試合を通して自己研鑽に励みたいと思えます。

最後になりますが、九州高校選抜大会に帯同審判として参加するにあたり、事前にご指導、ご助言をいただきました多くの先生方に感謝申し上げます。

九州高校選抜大会（佐賀大会）審判総括

1 レフェリー団

- ・各県帯同8ペアに加え、開催地から3ペア追加していただき、11ペアで運営。初日、2日目は16試合ずつとなり、1日2試合のペアが5ペアずつ必要となる。攻撃回数が増えていく展開が多くなり、審判員も特に男子の試合は1日1試合と配慮した方がいいかもしれない。途中交代要員も含め、4会場の場合、各会場3ペアの計12ペアでの運営を来年度以降要望したい。（開催地準備が5ペアとなる）
- ・審判団は、「Step by Step」および「B級審判員の目標チェックリスト」に従い、自己評価、相互評価を行った。試合後も会場ごとに活発な意見交換ができていた。また、児玉競技委員長、亀川、井原両副審判長からも適宜指導助言を頂きながら、日々研鑽される姿勢には好感がもてた。是非、各地における大会においても、相互チェックを含めたミーティングについて、積極的に取り組んでいただけるよう、審判員に依頼した。
- ・初日、2日目は試合後審判員は集結し、ミーティングを行った。佐賀県協会の計らいで会場等も確保していただき、充実した意思疎通の場が持てた。

2 レフェリングについて

- ・「誠実さ」が伝わる
今回は平均年齢30歳前半台、まさに九州ブロックの次世代を担うレフェリー団が集結した。高校生カテゴリーの最高峰の大会である選抜大会にあたり、フレッシュな顔がそろった。高い緊張感の中であったが、試合に集中し、「誠実」に振る舞っていた。このカテゴリーでチームから認められるには、かなりの時間を要する。この姿勢を忘れずに、各地域で取り組んでいくことによって、レベルアップが期待される。
- ・コートレフェリーの位置取り
初日の課題をうけ、2日目の目標に「コートレフェリーの位置取り」について掲げた。コートレフェリーの位置が遠すぎるため、ピボットゾーンへの管理が弱く、口頭はおろか、フリースローの実施も正しく管理できていない。攻撃展開に合わせ、最終局面の近づくほど、「13m付近」を目標に位置取ることを指導した。しかし、これだけでは十分ではなく、プレーヤーの視野の中にはいり、攻撃の展開に合わせ、ピボットゾーンの管理をするという、本来の業務のための前段階であることを忘れてはならない。現在求められているハンドボールのレフェリングに求められる大切な要素であり、各県帯同レフェリー全てにおいて、あてはまる課題であった。
- ・ステップ
全体的に甘い。ボールをキャッチした時点での足は、床の上か空中か。また、2+2のステップして得点につながるケースも多い。チームが違和感を感じないからいいのではなく、正しく運用させるべきである。防御側によって「歩かされる」ケースや、防御されたまま「歩く」ケースもある。ペア間の基準（バランス）が異なるペアが多かった。また、一方のレフェリーが「厳しめ」、もう一方が「明らかなのを吹かない」といった運用もあり、試合が進む中で、チームからの「違和感」を助長して

いるケースも見受けられた。各自、JHLチーム・レフェリー向けに配信しているステップについての映像資料を閲覧し、参考にしていきたい。以下にURLを示す。

https://drive.google.com/drive/folders/lwueW4Nhq3ir_7eZehz-PLTt5pZJa-Epf?usp=share_link

- ・明らかな得点チャンスと7mスロー

概ねよし。しかし、競技規則14:2「競技規則14:1aに示したような違反があるにもかかわらず、プレーヤーがボールと身体を完全にコントロールしている状態ならば、たとえプレーヤーが明らかな得点チャンスを生かせなかったとしても、7mスローを判定する必要はない。」の意味を捉えること。違反行為の影響、攻撃側プレーヤーの進路に影響があったかどうかなどがその判断基準となる。

- ・罰則

このカテゴリーでも、8:5（失格）は起こり得ることとして準備しておく。違反をうけたプレーヤーの競技の続行の可能性が、今後あるのかないのか。特に自力では起き上がれない、長時間倒れたままの状況が生じた場合は、8:5の適用の可能性あることを念頭に。また、違反はあったが、その違反は「成功したか」どうか。軽微な違反（その違反を受けたプレーヤーには影響がほぼない）にまで、細かく罰則を適用している場面も見受けられる。個々の事象が「切り取られた」クリップではなく、それまでの試合の流れの中で、違反として大きいのか軽微なのかを、プレーヤーの発達段階等も考慮しながら適切に運用していきたい。

- ・情報発信

速攻中に、レフェリーから防御側プレーヤーに「さわるな」などの指示は必要ない。これは、防御側チームの「権利」を奪うことになりかねない。ピボットゾーンの管理の際に「ユニホーム」などの言葉をかけるのは、目前に「ユニホームをつかんでいる」等の「行為」が実際に行われているからである。実際に行われている「行為」に対し、それで「いい」のか「よくない」のかを、口頭またはBL（ボディーランゲージ）をもって示すことができるようにしてほしい。

- ・余計な笛を減らす

GKがボールを阻止し、リバウンドボールがGA内にあるシューターにあたった。この状況で笛を吹くことは待つ。ボールがそのままGKのチームに向かう可能性もある。レフェリーは待たなければならない。このような「余計な」笛を吹くことで、アドバンテージを失わせることがないように、日頃から心がけておく。いかに笛を少なくして試合をマネジメントしていくかが、近年求められているレフェリングである。当然、速やかに笛を吹かなければならないケースもある。

- ・立ち上がり15分間

この時間の意味をしっかりと捉えておく。この時間で、YC等を示す場合は、「強く」「明確に」「はっきりと」示すこと。チーム役員への対応も含め、この時間帯で「弱さ」という基準を示さないように。（審判員の心得：リーダーシップ）
また、この時間で「各種スロー」の実施をいい加減にさせないこと。スローオフ時、笛の前にセンターラインを超えているプレーヤーがいる場合や、フリースローの際のポイントと3mの距離など、スピーディーな展開に任せすぎにならないようにすること。

- ・「リスク」を少なく
試合の流れ、局面を考慮しつつ、
 - ①そもそもボールを失ったチーム（ミスをした、シュートを放った）はどちらか
 - ②自分から違反を誘発させる行為（攻撃側も防御側も同様）
→笛を吹いて判定した方がいい場面もある
 - ③打ったシュートがGKのどの部位にあたったか
→苦し紛れに打ったシュートがGKの頭部付近ならば・・・
 - ④同一チームに続けて2人目の退場者を判定する場合。2人目は1人目の基準に比べてどうであったのか。明らかなもの、納得されるものであるべき。

- ・「安心・安全」を裏付けるレフェリーの技術
 - ①攻撃側の違反（正しい防御行為）を正しく見極める
 - ②違反を受けたプレイヤーの損傷具合に応じた罰則の適用
8:3 8:4 8:5 「両レフェリーによる協議」も含め
 - ③笛のタイミング（発展性のないプレーの切りどころ）

- ・通信機器が機能しないこともある。想定した心構え
「アイコンタクト」「BL」をうまく使えるように

- ・走り方、ゼスチャーの仕方、方向指示、立ち居振る舞いに「弱さ」がないか
→「いい人」だけではいけない。だめなことを伝えるときに「弱い」「いい人」だと正しく伝わらない
「弱さ」ではなく「やさしさ」である。そして「強さ」も必要。

3 最後に

本年度、九州審判長が立ち会うブロック大会は、本大会をもって最後となる。本年度は全大会に参加することができた。withコロナとして、3月の九州中学生選抜大会を含め本年度は全ての大会を行うことができそうである。開催地の皆様方には大変お世話になった。

また、九州協会主催大会における、各レフェリーによる振り返りシートや、配付資料は全てGoogleフォルダ内に格納している。本年度の九州協会審判部の取り組みの成果として残し、次年度以降に繋げていきたい。本大会のGoogleドライブ内に、本大会の振り返りシート等を後日格納するので参考にさせていただきたい。

来年度は、九州ブロックで2つの全日本大会が開催される（ジャパンオープン・特別国体）。また、その翌年度も、国民スポーツ大会、全国高校総体とつながっていく。まさに、九州ブロックレフェリーの力が必要になってくる。その点では、今大会のレフェリー団の集結は大変意味深いものがあった。

来年度より、日本協会が「新規程」を導入される。あらたに、テクニカルオフィシャルや審判指導員の有資格制度がスタートする。新しい時代に入っていき、「チームのため」「ハンドボールのため」に存在するレフェリー・テクニカルオフィシャルの資質向上にも務めていかなければならない。

今大会参加レフェリーには、新時代のスタートにあたり、新時代のレフェリーの中心としての活躍を期待する。

2023年2月6日

九州ブロック審判長 福島亮一